

【アメリカ情報】



reporter
NIWA

セレブに超人気なカジュアルブランドショップ

2004年の夏からジワジワと人気が拡大し、2005年になって大ブレイクを果たした有名店。アメリカ全土に約400店舗を展開していますが、日本の直営店出店計画は残念ながらペンディング。

このブランドの歴史は深く、ジョン・F・ケネディ、アーネスト・ヘミングウェイといった歴史に残る人物たちにも愛用され、現在ではハリウッドスターや日本の芸能人などセレブが身につけていることでも、話題になっています。

ブランドコンセプトのこだわりは深く、お客とスタッフが同等のレベルに立つようにあいさつも「May I help you?」ではなく「What are you looking for today? (今日は何をおさがし?)」としています。そして店員はみんな美男美女。

平均売場面積は50坪。外観やインテリア、BCMにいたるまでタウンハウスにふさわしいもので構成されインテリアコンセプトは「避暑地にある友人の別荘に遊びに来たような落ち着きのある空間」といったところでしょうか。

そんなこともあってお店の作りは住宅さながら。「仕切」は多いし照明はすごく暗い。什器レイアウトもツメツメ。そんなこんなも含めて「セレブ別荘」っぽいのです。

はっきりいって一般的なVMDのセオリーは無視(そこまで言い切れない?)。それより「ブランディングコンセプトを重要視している」ということがわかりやすくあらわれています。

VMDもセオリー通りばかり提案せずブランディングに合わせて提案していかないといけない...というよりそれも含めて相対的に考えて初めて「VMD」なのでは? ...と考えさせられます。

熟年女性の共感を呼ぶSPAチェーン

ベビーブーマーを中心とする熟年層(35歳~55歳・メインは45歳)をターゲットにカジュアルからドレスアップまでの生活シーンを提案し、全米のSCに400店舗展開するSPAチェーン店です。

熟年の気になる体型をくみ取った、着やすく快適で、美的に刺激のあるファッションを創造すると共に、比較的上質な素材をリーズナブルな価格帯で提供しています。ファッション衣料から、靴、バッグ、ヘルム、ジュエリー、腕時計まで、着こなしの為のアイテム一式を熟年女性の「クロゼット」として、「行きつけの店」になっているようです。

キャラクター性のあるマネキンを使用し、コーディネート展開することでターゲット年齢を感じさせない若々しいカジュアルなイメージ戦略がなされています。

商品のリード・タイムは、なんと2週間だそうです。顧客の好みの変化に合わせて、すばやく商品ラインを入れ替えることができる、それがこのお店の売れている強みのようです。

米、経済紙で『最も働き甲斐のある店、No.1』に選ばれたスーパー

ウォルマートの影響もあり、全体的に縮小傾向のスーパー業界ですが、この店はウォルマートに出来ない事に力をいれ、食材とサービスの強化・差別化により勝ち残り、今も積極的に進出しています。

売り場の半分はグロサリー(通常の食品や雑貨)で構成され、シンプルな環境の中、商品も低価格で訴求しています。

一方残りの半分は、付加価値のある生鮮食品で粗利を得るために、ヨーロッパのバザール風の環境で楽しい売り場にして、サービスも良く活気もあり、売り場を上手く使い分けているといった感じです。

その中でも、所々に設けられたクッキングステーションでは専門のシェフが食材を取り分け、目の前で調理してくれるサービスがあり、新鮮さと出来立ての美味しさが、非常に良く伝わってきます。シェフの動きもスマートで、アイキャッチ効果の強いパフォーマンスが繰り広げられています。

また、HMR(ホム・ミル・リブレイト)を早くから導入したことで知られていて、惣菜コーナーの充実と共に、2Fのイートインコーナー(200席)で買った惣菜などが、食べられる事が出来る為、食事を効率的に済ませたい人達にうけているようです。

この店の方針は「慈悲深い独裁主義」とも言われていて、従業員やベンダーに対して非常に厳しい規則があるのに対して、一方では年収5万5千ドル以上の従業員には、医療保険の負担が0%で、年金積み立ては50%、会社が負担してくれたり、パートタイマーに対して奨学金を出すなど、従業員のやる気を出させる仕組みが有るようです。



reporter
SUMI



reporter
OGAWA



【ロハスな休日】

大仙院の枯山水は、それぞれの特徴を持った石たちが、見事にその役割を果たしています。大きな石によって滝が生まれ、水が流れ落ち川になり舟石が置かれ、岸の向こうの山々を望みながら、山水の世界を巧みに表現しています。

この枯山水は、方丈を一周し表側に来ると何も無い白砂だけになります。それはちょうど人が生まれ、死に至るまでの様を見せてくれているのです。一番大きな石組みによる滝から、石はだんだん小さくなり、やがて砂へと変化していきます。

人は大きな煩惱と共にこの世に生まれ、色々と学ぶ中で、角がとれ煩惱も砂のように小さくなっていく事を願っているかのように表現されています。いつか舟石に乗った私は、その世界を浮遊していることに気がきます。

そして、方丈の一番奥、砂だけの世界にボツンと沙羅双樹の木が植えられています、、諸行無常。

今、私はどのあたりの、どの石なのだろうか? 止まった時空の中で、ふと問いかけてみた。

語りかける石たち



reporter
IWA I